連載― 評価について

「話すこと・聞くこと」の評価の観点

―絶対評価と個人内評価の視点から―

足立区立西新井第一小学校
坂本（さかもと） 喜代子（きよこ）

新しい評価の考え方で大切な視点は二つある。絶対評価と個人内評価である。一つ目の絶対評価とは、学習指導要領の目標に準拠する評価であり、教師は評価の観点と基準を明確にすることが求められる。二つ目の個人内評価とは、一人一人の児童が自分のよい点や可能性、進歩の状況などを評価するものであり、そのためには児童自身が自分の「話すこと・聞くこと」を振り返る力を育てることが必要になってくる。

以上の二つの視点から、第五学年の「話すこと・聞くこと」の教材「インタビュー名人になろう」を例にして、評価について具体的に考えてみよう。

1　単元の目標と評価規準及び評価の基準

観点別学習状況評価に向けた参考資料である『平成十四年度版　小学校「国語」新しい評価のために』（光村図書）では、評価について次のように設定している。

〈教材名〉「インタビュー名人になろう」

〈目標〉

●話の組み立てや言葉遣いを考えてインタビューの練習をし、自分の学習に生かす。

〈評価規準〉

〔関心・意欲・態度〕●インタビューの計画を立てたり、インタビューを経験したりすることを楽しんでいる。

〔能力／知識・理解・技能〕●インタビューの組み立てを考え、相手の話を聞きながら適切な言葉遣いで話している。（話・聞アイ）

〈評価の基準〉

●インタビューの経験を振り返って、よりよいインタビューをする工夫を考え、練習しようとしている。

【支援】プロのインタビューや、児童のインタビュー例を映像で見せ、イメージを鮮明にさせる。

●インタビューを充実させるための準備の必要性や聞き方が分かり、練習してインタビューをしている。（話・聞アイ）

【支援】事前準備を丁寧に行わせる。上手にできた例などのビデオを用意し、生きた教材とするとよい。相互批正しながら練習を繰り返すことで、慣れるようにさせる。

【発展】ビデオなどを見て、相手の立場を考えてインタビューをすることの大切さやインタビューで気をつけることについて、自分で考えて工夫させるようにする。

2　評価の具体例―絶対評価の視点から

音声言語活動の難しさはその場の話の相手、内容、目的、場面によって大きく左右される点にある。相手の話に応じながら聞き出すインタビューではなおさらである。事前に準備をしておくことは有効であるが、瞬時に対応することは児童にとって難しい。それだけに、教師はこの学習によってどのような力を身につけさせたいのかをあらかじめ吟味し、絞り込んでおく必要がある。ここでは、「質問する力」「受けて返す力」の二つを例に考えてみよう。

①的確に質問する力

知りたいことをたずね、答えを得るためには的確に質問できなくてはならない。総合的な学習の時間などで必要とされる基礎的な力でもある。この力を身につけさせるために必要な教師の観点は、次のようなものである。

・自分が質問する内容について聞きたいという思いをもてているか。

的確に質問するためには、「聞きたい」「知りたい」という思いをもつことが第一歩である。主体的に学ぶことに慣れていない場合や、学習経験が少ない場合には、どうしてよいか分からず意欲に結びつかない。そのような児童には、「聞かなくてはならない必然性」「自分が本当に知りたいこと」をもたせることである。児童が興味のある話題を選び、「インタビューしたことを下級生に説明しよう。」などの目的意識をもたせるとよい。

・聞きたい内容を分類・整理し、聞きたいことの要点をはっきりさせているか。

質問はしているが、場当たり的で、思いつくままに問答し、一問一答で終始してしまうことがよくある。このような場合は、質問内容について細かい計画が必要である。質問項目・それに対するいくつかの答え、それに対応した質問と、一連の流れで用意させる。そうすると、充実したインタビューを経験することができ、次第に聞きながら要点をまとめる力を身につけることができる。

②相手の反応に応じて受けて返す力

単に聞きたいことについて回答してもらうのであれば質問紙に記入してもらえばよい。話し言葉でやりとりすることのよさは、その場で感じたことや知りたいと思ったことを、すぐにたずねることができる点である。相手の反応に応じて受けて返す力は、人間関係が希薄化して

いる現在、最も求められている力といえる。

・聞いた内容に対して、分からないことをたずねたり、共感の思いや感想を返したりしているか。

思いもかけないことを言われたときだまってしまう。知らない言葉や内容を話されたとき、分からないまま次の質問に移ってしまう。このような児童は、どのように伝えたり返したりしたらよいのかを知らない場合が多い。ここでは「モデル学習」が有効である。ビデオや音声教材を利用して、「分からないことをたずねているところ」「感想を伝えているところ」など、焦点を絞って見つけさせる。聞きながら気づいたところでストップと言わせたり、文字化した資料にサイドラインを引いたりするなどの学習で具体例を見つける。さらに、二人組で文字化した資料をそれぞれの役になって読み合ったり、身近な話題で質問し合ったりし、感想を伝え合うような取り立て指導を行うとよい。初めはだまってしまう時間が長いが、次第に自然に感想を付け足しながら次の質問ができるようになる。

3　評価の具体例―個人内評価の視点から

一人一人のよさや可能性や進歩の状況を評価するためには、児童自身が自らの学習状況に気づき、評価が自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促すためのもの（自らの学習の改善や生き方の確立に結びつくもの）である必要がある。これは自分自身の話し言葉を自己モニターする力ともいえる。

①話す力・聞く力

自分自身の話し方や聞き方を見つめ、その状況を知り、よりよくするにはどうしたらよいかを児童自身が考える力を育てたい。

・自分の話し方や聞き方を意識し、自分のめあてがはっきりしているか。

「しっかり聞く」「ちゃんと話す」というようなあいまいな認識から、自分はどのように話したり聞いたりしているか、具体像をもてるようにすることが必要である。

自己評価の手立てとして、自分の話している様子をテープに録音して聞いてみたり、ビデオに録画したものを見たりする。自分の話した内容を思い出しながら書き起こしたり、テープを文字化したりすることも大変有効である。ただ、児童だけでは時間がかかるため、教師の支援や家庭の協力を得るなどの工夫が必要である。

また、自己評価の手立てとして、友達がインタビューしているところを観察し、よい点や気づいたことを学び合わせる。友達のよさを「○○さんのワザ」として学級で共有し掲示していき、その学級独自の手引きを作成することもできる。

自分自身の話す力・聞く力が自覚できると、自分が次に目指すめあてがはっきりし、いつ、何を、どのように評価する必要があるかが明確になるだろう。

②考える力

人は、自分が話すときは聞き手が理解しているかどうかを見、聞くときは話し手の言いたいことは何か、自分の考えとの共通点・相違点は何かを考えている。話しながら自分が考えていること、聞きながら思っていることを意識化させることによって自らの学習を改善できることにつながる。

・心の中のつぶやきを意識して、それを次の発言につなげているか。

別のことを考えていたり、聞き流してしまったりして話を聞き取れないことがある。そのような児童には、意識して心のつぶやきに耳を傾け、聞いているときの内言を文字化することが有効である。聞きながら思いついたことを声に出してつぶやいたり、メモをしたりする。あるいは、インタビューを文字化した教材を途中まで読み、その時どのように心の中でつぶやいたかを発表し合う。「そうそう、そういうことあるなあ。」「へえ、そんなふうに思うんだな。」「えっ、それ何だろう?」というように、一人一人の心の言葉を紹介し合い、それを次の発言につなげるとしたら、どのように話したらよいかも考える。心の中のつぶやきが共感であったり、疑問であったりしたら、「聞いていて思ったのだけれど・・・」「さっき言ったことは○○ということ?」など、自分の次の発言につなげることができる。

このようにして、自分が考えていることを自覚できるようになることで、自分の話し言葉をモニターする力が育つだろう。話し合いや対話は次々に話題が移ってしまうため、このような「ストップモーション学習」は取り立て指導として有効である。

4　今後の評価

「インタビュー名人になろう」の教材を例に、絶対評価と個人内評価の視点で、評価の基準に児童を到達させるための指導や支援の方法について述べてきた。新しい評価の考え方では、指導と評価の一体化が重視されている。児童の一人一人が、個性や能力に応じて話すこと・聞くことの基礎・基本と「生きる力」を身につけられるような指導と評価の一体化が必要である。そのためにも、教師の絶対評価と児童自身の個人内評価とが常にバランスよく位置付けられなくてはならない。児童の「話すこと・聞くこと」の記録をポートフォリオとして蓄積し、自己評価、相互評価、複数の教師の多面的な評価がその中に盛り込まれるように工夫していくことが大切である。